

～ 「人」という漢字 支えたり・支えられたり ～

今日から、平成29年度第1学期です。人間はこうやって、切れ目のない時間の流れに自分たちの都合で区切りを入れ、節目を作っていきます。節目を作って物事を把握しやすくしていくわけですが、私が大切にしたいのは「人は節目で伸びる」ということです。節目だから気分も改まって何か目標を立てる、これを頑張ろうと決意する。そして、それに向かって本気で頑張ろうとするから伸びていく。新学期は、伸びるきっかけとなるチャンスです。節目で伸びる人になってくれたらと思います。

さて、平成28年度は出雲高校にとって、文武に亘って記憶に残る充実した一年でした。私は、何度も「自立・協働・挑戦」を大切にしたいと話してきましたが、平成29年度を充実した一年とするために、今年もまた「自立・協働・挑戦」をキーワードにしたいと思います。ただ、この「自立・協働・挑戦」は抽象度の高い言葉でもあるので、今日はこのことについて、私なりにもう少し具体化して話したいと思います。

○「自立」について

物理学者のアインシュタインが、「教育とは」と問われ、こう答えているそうです。

「自分の頭で考え判断する能力を育てること（専門的知識を習得させることなく）」

学校の中で自立した個人を育てていくこととは、こういう自分の頭でしっかり考えて判断する能力を持った人を育てることではないかと思えます。自分の頭で考えて判断するチャンスは、学習の場面でも部活動の場面でもいくらでもあります。自立した個人であるための第一歩として、まず「自分の頭で考える」ことを普段から大事にして欲しいと思います。

○「協働」について

はじめて担任した学年の生徒と同窓会をした時、幼稚園の先生になった卒業生から「先生、人に迷惑をかけることだけはしちやいけないって教えちゃだめだよ。そう言い聞かされて育てられた子は、人に迷惑を掛けられた時、その人を許せなくなるんだから」と教えてくれました。自分も誰かに迷惑を掛けることもあると自覚していれば、誰かからの迷惑な言動も、お互い様と多少は許容できるようになっていくのではないかと。お互いに迷惑を掛け合って存在していると認め合う人と人との関係性についての認識が、多様な他者との協働を成り立たせていく要素の一つではないかと思えますがどうでしょうか。

○「挑戦」について

灰谷健次郎の『兎の眼』という小説の老教師の言葉に、

「人間は抵抗、つまりレジスタンスが大切ですよ、みなさん。人間が美しくあるために、抵抗の精神を忘れてはなりません」とあるのを、二十代の教師に成り立ての頃に読んで、手帳に写しました。

人間が美しくあるためには、抵抗の精神が必要であるという言葉は、若い私に極めて魅力的な言葉でした。周りに流されてしまったり、理不尽だと思うことに目をつぶってしまったり、或いは自分の怠けようとする怠惰な心に身を任せてしまう、そんなことに何とか抵抗して、そうならないように努めるところに人間としての美しさが表れる。

私は、挑戦とは、望まない現状に安住するのではなく、むしろそれに抵抗し、何とか良い方向に向かおうとすることではないかと思えます。安易な方向に流されそうな自分に何とか抵抗するところに挑戦が始まる。そして更に言えば、その挑戦によってもたらされるものが、新たな価値の創造につながり何かに貢献することにつながれば、言うことないと思います。

私の好きなコミックに、小山宙也の『宇宙兄弟』があります。宇宙飛行士を目指す主人公の南波六太が所属するJAXAの所長の言葉を引用して話を終わります。

「人」という漢字は、二人の人が互いに支え合っていると言います。しかし、どう見ても、一方が一方を支えているようにしか見えない。私たちはあなた方を全力で支えるので、宇宙を目指して訓練に励んでくれ、という言葉です。

私たち出雲高校の教職員は、今年度も全力で君達を支えます。だから、どんどん伸びていて下さい。そしていつか、今度は君達が誰かを支える人になってくれたら嬉しいです。

では、一緒に頑張っている一年にいきましょう。